

論文の内容の要旨

論文題目 ベトナム北部における貿易港の考古学的研究
 —ヴァンドンとフォーヒエンを中心に—

氏 名 菊池（阿部） 百里子

本研究は、11世紀から18世紀までベトナム北部を支配した大越国の交易に関する考古学的研究である。研究では主に、流通遺跡である大越国の貿易港・雲屯とフォーヒエンに注目し、その考古学発掘調査を実施した。遺跡から出土する、海域アジアに交易品として運ばれた陶磁器や銅銭について、その生産、流通、消費の各段階に焦点をあて、比較、考察をおこなうことで、海域アジアの交易ネットワークにおける大越国の位置づけや役割を明らかにすることを目的とする。

研究では主に、ベトナムにおける陶磁器の生産活動と港における交易の関係、そしてその港から運ばれた陶磁器の行く先と消費目的を比較検討した。本研究は、これまで個別に研究されてきた生産・流通・消費の各段階を、港を媒介として相互に関連づけ、その歴史的背景をベトナムの対外貿易政策から論じるものである。

大越国の交易を論じた論文は多数あるが、本研究は生産と消費をつなぐ存在としての港を軸とし、流通していた交易品から大越国の交易の様相を探る研究であることに特色がある。

第1章では、本研究がおもにあつかう、大越国の手工業製品であるベトナム陶磁器の生産地についてまとめた。李朝期には、都が置かれていたハノイ一帯で磁器生産が行われ、おもに宮殿で使用される器が生産されていた。陳朝期になると、陳朝皇族の支配地域において陶磁器生産が行われていた。黎朝期には、ハイズオン一帯の生産活動が活発化し、輸出向けの製品を大量に生産するようになる。本章では、これら一連の陶磁器生産地の様子を提示した。

第2章では、ベトナム北部クアンニン省ハロン湾の北側、ヴァンドン県において実施した発掘調査の概要をまとめ、雲屯港としての姿がみられるようになるは13世紀後半以降であると考察した。そして、陳朝期の雲屯港はコンタイ島にあり、その出土陶磁器

の様相のちがいから港の構造を考察した。それは、コンタイ島第5地区一帯に元末から明初にかけて生産され、さかんに海外に輸出された貿易陶磁器が多数出土していることから、5地区一帯を中国陶磁器を満載した外国籍貿易船の停泊地であるとした。また、第3地区一帯には第5地区と並行する時期である14世紀のベトナム陶磁器が出土しており、さらに15世紀のベトナム青花も多数出土していることから、国内で生産、集荷された陶磁器を小舟で陸から島に運び、貿易船に積み替えるために荷下ろした停泊地であるとした。

そして、カイラン地点では、16世紀後半から17世紀の中国やベトナムの貿易陶磁器である青花類が多数確認できることから、黎朝期の港として位置づけた。このことは、雲屯が17世紀においても港であったことを明らかにした。

第3章では、フンイエ市の中心地で実施した発掘調査の概要をまとめ、フォーヒエンの国際貿易港としての成立年代と歴史的変遷について考察した。

出土した遺物は、ほとんどが17世紀後半から18世紀代を代表する貿易陶磁群であった。また、朱印船はトンキンから中国陶磁器やベトナム陶磁器を日本に運んでいるが、同時期の朱印船寄港地ホイアンで出土するような、16世紀末から17世紀前半の代表的な貿易陶磁群はフォーヒエンではほとんど出土しない。この状況から、フォーヒエンでは17世紀前半にさかんな商業活動があったとは考えられない。

これまで、1637年設置のVOC商館の場所はフォーヒエンとされてきたがフォーヒエンは1680年代以降華人の移住によって繁栄するのであり、VOC商館はフォーヒエンにはなかったことを考古学的に明らかにした。また、ハノイ市内中心部の遺跡からはVOCが盛んに輸出した肥前磁器が多数出土していることから、商館はハノイではなかったと結論づけた。フォーヒエンには、1670年代以降商館をおいたEICやフランス、中国人商人の商館や倉庫があった可能性を指摘した。

第4章では、李朝と陳朝の陶磁器が出土するベトナム国内外の遺跡についてその概要をまとめ、ヴァンドン地域で出土する陶磁器と比較することで、雲屯が港としてあらわれる時期およびその背景と様相について考察した。

李朝期には、昇竜皇城遺跡の唐代・宋代の陶磁器やイスラーム陶器などから考察すれば、李朝期にはすでにベトナムの地で陸や海を通じた交易活動がおこなわれていたことはたしかであるが、ヴァンドン地域の考古学調査では、主要な遺物は元から明代のものであり、雲屯を経由しない交易の可能性を指摘した。そして、東南アジアで発見されている李朝陶磁器は、中国陶磁器のように、一定規模で輸出されたのではなく、海域アジアの交易ネットワークによって偶発的に運ばれたもと考察した。

陳朝期には陶磁器の大量生産もはじまり、国内の需要に応える必要性のほかに、琉球や東南アジア地域へも運ばれるようになった。ヴァンドン地域の考古学調査では、コンタイ島第5地区でインドネシアのトロウラン遺跡などアジアの港市各地で発見されている13世紀末から14世紀の竜泉窯や景德鎮窯の上質な貿易陶磁器群であり、そのモ

デルは 1323 年に沈んだとされる沈没船、新安海底遺物にもとめられる。陳朝朝廷にもたらされる商品が運ばれた港と位置づけることができ、コンタイ島が「官場」であったと考察した。ただし、昇竜皇城遺跡から出土している陳朝期の中国陶磁器はわずかであり、雲屯港にもたらされた中国陶磁器は、大越国むけの商品ではなく、出会いや中継貿易によってその大部分がマジャパイトなど海域アジアへ分散していったと考察した。

交易の背景として、陳朝期の陶磁器生産地ヴァンイエンは、陳の王族の南冊勢力圏内に位置し、陳の王族の田庄がおかれていたこと、雲屯は南冊勢力圏内に位置していたことから、陳朝の王族の経済活動の中で貿易港としての姿をあらわしたと考察した。

この時期、日本へもベトナム陶磁器が流入しており、それは 14 世紀末から 15 世紀初頭の活発な壱岐・対馬の倭寇や中国人商人の活動を介した南冊勢力による雲屯を通じた交易の商品であったと考察した。また、インドネシアや沖縄にも陳朝期の陶磁器が出土しており、共伴する中国陶磁器の様相も共通する。このことから、マジャパイトや琉球、大越を含む海域アジアの間を動く海商による、雲屯を出会いの場とした中国陶磁器の交易があり、そのなかでベトナム陶磁器も運ばれたと考察した。

第 5 章では、黎朝前期の陶磁器が出土するベトナム国内外の遺跡についてその概要をまとめ、ヴァンドン地域で出土する陶磁器と比較することで、大越国の陶磁器輸出が最盛期をむかえる背景として陶磁器生産技術の向上があったことを指摘した。

15 世紀中頃になると、ベトナム国内外の遺構から、それまでとは全く異なるベトナム陶磁器が出土するようになる。それは、薄胎白磁碗に代表され、15 世紀後半の技術と品質向上、大量生産の背景に、景德鎮から、あるいは雲南からの陶工の移入、あるいは技術の伝来を推定した。この薄胎白磁碗は、ベトナム国内では昇竜皇城遺跡や黎朝の陵墓藍京遺跡など、ベトナムでも特別な遺跡でしか出土していないため、官窯の製品と考察した。海外ではインドネシアのトロウランや沖縄の首里城や今帰仁城跡に限定されることから、また、マジャパイトはベトナムへ青花のタイルなどを注文し、その生産地も官窯であることから、黎朝前期の交易は官窯やチュウダウ窯系の製品がその主要な商品となっていたと考察した。そして、マジャパイト王国からの注文生産品とされるベトナム青花のタイルがヴァンドンで発見されているため、この朝廷によって管理された公貿易が雲屯で行われていたと考察した。

第 6 章では、黎朝前期の陶磁器が出土するベトナム国内外の遺跡についてその概要をまとめ、ヴァンドンでは 18 世紀まで交易活動が継続していたことを指摘した。また、ベトナム北部出土の一括出土銭の成果をベトナム銭貨の歴史のなかに位置づけ、ベトナムにおける銭貨の使用の歴史を考察した。そして、VOC や EIC がベトナム北部の拠点を撤退する理由として、中国商品輸出の回復によるトンキン貿易の不調があり、その背景として、黎朝の消極的な対外交易政策をあげた。それは、黎朝が海域アジアの交易から得ていた銅が、ベトナムに大量流入するようになったためであることを考察した。